「現代靴職人志望事情考」
―技術者養成の必要性とその背景―

東京都立足立技術専門校台東分校　非常勤講師　平　田　秀　雄

巷では、コンフォート・シューズ（足に優しい靴）が話題になっているが、現代の若者達はそれだけでは満足しない。

今年の５月、イタリアはローマの「有名ブランド靴とカバン店」に行ったときのことである。店員は客とマンツーマンの応対をしているので、店の外には入店を待つ人の行列が出来ていたが、そのうち70～80％は日本人の若い女性達だった。他は日本以外の外国人だった。

日本人の若者達は少しぐらい履き難くても、自分の好みのファッション（流行）に合った靴なら買ってきて履いてしまう。それどころか、自分の好みの靴を、自分の手で作りたいと考える若者が多くなっている。

学科の授業

私が講師をしている台東分校に入校してくる生徒も、ここ数年大きく様変わりをしてきている。過去には20名の定員に満たない年も何年か続いた事がある。また、入校してきた生徒は、年齢も10代から50代と幅があり、卒業後は「製靴メーカーに就職して職人になりたい」という目的の生徒が多かった。

今年、台東分校の入校希望者は定員の５倍を越した。平均年齢も若くなり、大卒者が半数を超す状況となっている。新入生の中には、一度は製靴業界に就職はしたものの、「製靴機械による製法の生産体制」に失望して、製靴技術の全行程を身につけるべく入校してくるものもいる。

彼らに入校の動機を聴くと「手作りの靴を作れるようになりたい」そして、『何時かは自分で靴工房を開きたい』と言う考えで入校する生徒が大半を占めている。また、「靴作りを自分の一生の仕事にしたい」と考えている入校希望者もいるようだ。

インターネットの靴の掲示板を覗いてみても「靴作りを覚えたい」という若者が多くなっている。

この様に、「靴作りを覚えて一生の仕事にしたい」と考える若者がいるからには、日本の製靴産業の発展のためにも、職業訓練としての技術者養成は欠かすことの出来ない事業といえるのではないだろうか。

現在、日本の製靴業界は大きな転換期に立たされている。我が国に洋式の靴の製法が導入されて130年足らずの間に、その製法は大きく変化した。特に昨今での底付け技法は、機械化が進み、強力な接着剤の開発による製法の変化が大量生産を可能にし、底付け機械による製法が中心になっている。

当然、接着剤を使う機械生産に向いた合成素材の開発が進んだ結果、『足を保護する』という目的を軽んじる素材も出てきている。低価格の輸入靴と競争するために、コストを下げなければならないというやむをえない事情もあるのだが…。コストを下げるといえば、技術者(職人)の加工賃も同じである。

人件費をつめるには作業を細分割して簡単な作業として未熟練でも加工できるように工夫するなり、また、工程を省略する等で能率を上げ

る必要がある。

本来、靴には『足を保護する』という大きな役割があるが、機械による流れ作業による靴作りでは、靴の専門知識を余り必要としないでも済む。そうして作られた靴は、一律に作られた硬い工業製品になり、微妙な風合いなどの温もりが欠けるといわれている。

手工具のみで作られた靴

単に、機械により大量生産された靴は、海外のコストの低い国で作られている製品と特徴に差がなく、価格面で押されて、危機に立たされている。

今後、大量生産の靴は国内で作るメリットは減少する一方だと思う。確かに静電気対策靴や雨に強い靴、空気循環靴等の付加価値をつけた靴は開発されているものの、業界はこんな時にこそ、過去の製靴法の中から「人件費の安い国では出来ない技法」で、もっと消費者の求めている部分や新しい製法がないか等で、見直しをしてその技法を導入して行くべきである。

また、機械による製造が主流になると益々分業化も進むであろう。分業化が進むと、靴本来の目的にあった靴作りの全工程を熟知した優秀な技術者が少なくなっていく可能性がある。そうなると製靴技法の伝承が難しくなってくる。業界も優秀な技術者が存在しているうちに、多くの工程をマスターできる技術者を育成するべきである。

いま、日本の製靴業界に変化を望んでいる人もいる。最近、靴業界で働く若い人達の中で、今までのような靴製造メーカーの経営方針に疑問を感じて、メーカーから離れて独立する人達もいる。彼らは、『自分の作った靴を履いてくれる客の、肌の温もりを感じながら、客の意見を直接取り入れ、靴作りをしよう』と考えている人たちなのだ。

靴業界が当校に求めている人材は、依然として機械生産に従事できるように訓練された生徒である。しかし最近の生徒が製靴技術を習得して仕事に就こうと考えている職場は、そういう所ではないようだ。『始めから最後まで自分の手で作れる』靴作りの場なのである。彼らが考えているような職場は無いわけではないが、非常に少ない。

そこに業界との大きなズレがある。消費者も一定形式の既製靴より、個性的な靴を求めている。作る側も手作りで特徴ある靴を模索している。これらをマッチさせたオーダーメードを拡げていくことも一つの方法であろう。

文末に当校の卒業生の活躍している様子を例示してみた。そこで、その様変わりしている現状を認識して頂きたい。

生徒の作った夢のある靴

最近、技術の伝承についての記事が目に付くが、時代の変化に合わせて「ものづくり」の製法も変化している。

消費者のニーズも変化している中で、技術を教える側の考え方も、指導法も、もう一度考え直すときが来たような気がする。日本の産業の一部として製靴業界が存在する限り、製靴技術者の養成は必要不可欠である。

ここで都立足立技術専門校台東分校について簡単に紹介してみよう。当校は全国唯一の製くつ関係の公共職業訓練施設である。台東分校「製くつ科」は昭和47年７月に設立され、今年で30年目になる。

最近入校してくる生徒の特徴は、文頭に書い

たとおりである。カリキュラムは数年ごとに業界のニーズに併せるべく、訓練内容の見直しを行いつつ充実を図っている。また、台東分校にも数年前から、マスコミからの取材が来るようになってきた。若者の「靴作り」への興味（関心）が高くなっていることが影響しているようだ。

応募状況もここ数年増加の一途を辿っている。入校希望者の年齢層はほとんどが20代で、入校後の学習態度も非常に熱心な若者達である。靴の養成機関である台東分校は、彼らに「足を保護する」という靴本来の目的に合った靴作りの技術を、生徒に正確に伝承しなくてはならないという義務があるのではなかろうか。

―各種の養成機関―

数年前から、量産化された靴より履きやすい靴を作りたいという若者達に呼応するように、靴作りを教える教室が全国的に増え始めている。

私の知っている限りで、専門学校及び教室（工房）等を列挙してみると以下のとおりである。

学校（教室）名	所在地	電話
都立足立技術専門校台東分校	台東区花川戸１－14－16	03-3843-5911
エスペランサ靴学院	台東区東浅草１－８－11	03-3873-7663
モゲ・ワークショップ	渋谷区神宮前４－22－７	03-3478-6162
シューズ・ラボラトリー	港区南青山３－３－６ TS南青山１Ｆ	03-3401-2871
文化服装学院	渋谷区代々木３－21－１	03-3299-2222
ギルド・ウエルテッド・フットウエア・カレッジ	台東区浅草６－８－７テイトビル猿若	03-5824-3218
フスウントシュー・インステイテュート	台東区駒形１－７－11	03-3843-6561
フロイデ（オーソペディ＆フットケア）	豊島区東池袋２－15－５	03-3983-0055
グレースシューズ工房	愛知県名古屋市西区菊井１－29－１	052-587-2275
神戸医療福祉専門学校三田校	兵庫県三田市福島501－85	0795-63-1222
神戸ものづくり職人学校	兵庫県神戸市中央区吾妻通４丁目	078-322-5332
丸手印靴工房	京都府八幡市男山長沢16－８	075-983-0213
かがみ式靴教室	埼玉県草加市金明町347－２	0489-36-6240

以上の中で、台東分校を除き、私が比較的知っている２校を少し詳しく紹介してみよう。

●『エスペランサ靴学院』

民間の靴の専門学校で最も歴史が古く、台東分校開校の翌年（73年創立）に開校し、今年で29期生を迎ている。昨年度からは訓練期間も２年になり訓練内容も飛躍的に充実した。

開校当時の入校生は、エスペランサの親会社が関西にあったためか、関西の靴メーカーなど業界の関係者が多かったようだが、最近の応募状況は、業界からの入校生はほとんどなく、在校生は台東分校とよく似た特徴を示している。

生徒の数は、台東分校の20名に対して、こちらは１～２年生合わせて70名と３倍強である。

訓練内容は、各種有る科目の中には、グットイヤー式製法もマッケー式製法もあるが、注目すべきは受講生の希望なのか製甲もすべて（ミシン掛けの部分）手縫いの靴作りを教えていることだ。これはいろいろな靴作りに応用が利き、彼らが卒業後自分の工房を持ったとき、アイディア次第では面白い靴が作られるであろう。

●『モゲ・ワークショップ』

原宿に、勝見茂氏がオーダー靴を作りながら始めた靴工房。12年前までやっていた靴の企画問屋業での経験を生かして始めた「ワークショップ」である。

趣味として靴を作りたい人向けの「靴の教室・ビギナーズ」と、靴作りを教えたい人達向けの「靴の学校・ワーカーズ」を開き、生徒が独立して自営が出来るように育成している。現在100名を越える生徒を教えている。

―台東分校の１年間の授業内容―

はじめに私の開いているインターネット・ホームページ「革靴職人」（URL http://www.hirata-oug.com）の中の「靴に関する掲示板」にアップされた方のなかで、私の興味を引いた投稿を紹介させていただこう。

前文略……『「目の前で転職やリストラを見た」、「足への興味」、「手の内で作ることの幸せ」、などが、私が靴に興味を持ったきっかけでした。時代背景があるとおもいますが、靴以外にも「職人」志望が多い今、一人一人は真剣に職人になりたいと努力しているのだと思いますが、あまりにも「靴作り」がもてはやされているので、その傾向はもしかして後から見れば「流行」と言うことで終わってしまわないか、自分はその「流行」に乗ってしまっていないか、つい戸惑ってしまいます。私も含めて10年後20年後に、そういった若者達はどうなっているのでしょうか。自分自身は純粋に単純に靴作りって楽しい（だろう）な、と思っているはずなのですが何故そんなに力強くないのか自分でも不思議です』……以下省略　台東分校に興味を持ち、入校を考えておられる方からの投稿である。

聞くところによると、イタリアの靴業界ではデザイナーの重要性が下がり、デザインそのものよりも生産技術が重要視されるようになったそうだ。

製造面での技術が優先されるようになってくると、靴を生産する企業とデザイナーが一体化して働くようになり、デザイナーの個性が出にくくなって来ているという。

このため伝統的な美しい靴の意識が薄れてきて、現在は高級靴と安くて履きやすい靴の二極化となっているようだ。

ここで、製靴技術を身につけようとする彼ら若者達を、受け入れる側である当校の１年間の授業内容について、記してみよう。

台東分校は、昭和47年７月に同和行政の一環として、職業能力開発促進法に基づき開校し、今年で30年目を迎えた。

平成13年度　台東分校訓練基準より

区分	科　　目	時限数	区分	科　　目	時限数
普通学科	社　会	62	系共通実技	安全衛生作業	18
	体　育	40		基礎作業	20
				裁断スキ折込基本作業	60
	小　計	102		縫製基本作業	94
系共通学科	安全衛生	4		小　計	192
	材　料	26	専門実技	製甲基本作業・紳士	120
	生産工学概論	20		製甲基本作業・婦人	120
	仕様積算	10		底付基本作業・セメント	90
				製甲底付作業・紳士	120
	小　計	60		製甲底付作業・婦人	120
専門学科	製靴法	56		製甲底付総合作業・①	180
	製靴機械	20		製甲底付総合作業・②	180
	デザイン及び紙型	40		応用実習作業・①	80
	総合演習	20		応用実習作業・②	80
				総合演習作業	20
	小　計	136		小　計	1,110
学　科　計		298	実　技　計		1,302
総　　計　1,600時限　（注・１時限は45分）					

台東分校の訓練基準を見ていただきたい。その特徴は、年間総訓練時限の約80％を実技の時間に当て、靴作りの技術者を育成するための職業訓練を行っている。

主要設備は、一般の靴メーカーで使用されている機械・工具等のほとんどが設置されている。また、製甲用ミシン34台のほか、マッケー用中縫い機、グットイヤー用出し縫い機などの設備も有し、当校は製靴設備及び教材等については大変充実している。

訓練期間は昼間訓練で１年間。指導員は現在１名。講師は４名である。生徒の定員は20名(但し、今年度は21名で実施している)。

１年間の訓練の流れは、訓練基準を基にして作成した「年間訓練教程表」のカリキュラムに沿って進められる。

４月～８月末までは全生徒が、学科では「材料」と「製くつ法」を、実技では、「基礎作業」で、工具の取り扱い・包丁研ぎ。「基本作業」では、甲革の裁断・コバ漉き・折込・ミシン掛けを可成りのレベルまで身に付け、その後、紳士・婦人靴の基本となる製甲を作る。次に、手釣込みによるセメント式の紳士・婦人靴の底付けを実習する。

９月以降、学科では「デザイン及び型紙」・「製靴機械」・「生産工学」・「仕様積算」等の授業が始まる。実技では訓練生の自主選択で「製甲コース」と「底付けコース」に別れる。製甲コースを選択した生徒は、より高度な技術の製甲作業が始まり、底付けコースを選択した生徒は、製靴機械による靴作りを始める。

希望者には、12月頃より、グットイヤー式製法・マッケー式製法等の「手縫い靴」の訓練も行う。また、「応用実習作業」の訓練では、自由制作の時間を設け、生徒各自が１年間で学習した個々の技術を基に、デザイン→型紙→製甲→底付けまで、すべての工程を通して靴を作り、仕上げてゆく喜びを本人が体験できる。

製甲作業

手作業による底付け

―卒業生の活躍事例集―

（事例　１）

靴製造メーカーのベテラン職人として夫婦で「取り仕事」をする　９期生

数年前、ある新聞に再雇用促進に関する記事の中で、再就職に成功した人として紹介された台東分校卒業生がいる。彼は20年前まで、繊維関係の仕事をしていたが、30歳を過ぎて訓練生として入校し、また翌年彼の妻が入校している。

夫婦とも中堅婦人靴メーカに製甲職人として就職し、３年目にそのメーカーの「取り仕事」を自宅で始め現在に至っている。数年前自宅を取り壊しビルに建て替え、家賃収入と仕事の２本立てで安定した生活を送っている。

（事例　２）

大手靴製造卸問屋の中堅社員として活躍する18期生

台東分校の訓練生時代、底付けを専攻した彼は就職先で靴型の開発を担当する。銀座の直営小売店は中年女性層を主な顧客とする有名小売店であるため、靴型には売れ行きを左右する重要な要素が含まれているようだ。

そんな彼は必然的に足に関する研究もしたよ

うで、今では上級シューフィッターの資格を取り、デパート等の靴売り場で働く人達にシューフィッターの資格を取らせるべく、自社の仕事の傍ら、講師として忙しい毎日を過ごしている。

（事例　3）

高級婦人靴メーカーの社長として頑張る　21期生

10年前は、モーターバイクのレーサーとして活躍していた彼が、父親の経営する高級婦人靴メーカーの後継者になるため、父の薦めで台東分校に入校してきた。在学中は目を見張るような勘の良さと器用さで優秀な成績で卒業した。

卒業後、父の仕事を手伝って３年目、東京都労働経済局（現、産業労働局）の事業の一環であるイタリアの「アルス靴学院」の研修生として派遣され、本場の靴作りの勉強をして帰国する。

その後順風満帆のはずの彼に、突然の父の急死という不幸が訪れた。その悲しみも見事に乗り越え、靴業界の不振の中、父の時代以上に業績を伸ばしている。また、台東分校にも時々顔を見せ、分校を終了した卒業生を次々と採用してくれている。

（事例　4）

今や若者達のカリスマ的存在になりつつある、手作り靴職人　21期生

意外と靴業界関係者には知られていないが、一般の消費者には一番有名な台東分校の卒業生である。都内版の読売新聞夕刊にＡ４サイズの写真入りで紹介されるなど、地方紙を含め各方面の新聞雑誌に紹介された紙面は10数回を記録している。

彼の靴作りは変わっている。台東分校を卒業後は、新宿駅前の靴の小売店に就職し販売員として顧客の接客をしながら自分の靴作りの方針を考えたようだ。そこで、出た結論が靴型を使わない靴作りだ。

台東分校で基礎を習った以外は全くの自分で考え出した靴の製法である。靴メーカーに持っていったら、おそらく「これが靴なの？」と言われそうな靴なのだ。ところが、若者達には、「斬新で今までに見たこともない素晴らしい100％手作りの靴」として受け入れられた。

その後、彼が定期的に開く個展には、多くの顧客が集まり、約半年分の靴の注文が入るという。修了生達の中にも彼を目標に第２、第３の手作り職人を目指して頑張っている者もいる。

（事例　5）

遠く北海道で活躍する鞄職人　23期生

革製品を扱うことに関しては共通するが、靴ではなく鞄を選んだ二人の話。台東分校に入学後知り合った訓練生同士で結婚し、鞄作りを独学で学び、その後北海道に帰り、札幌の郊外で「鞄職人」として工房を開いた。

彼らはインターネットを上手く活用している。オーダー靴では難しいが、鞄はネット通販での受注がしやすかったことが良かったようで、１年後札幌の中心地に工房を移し、さらに「鞄ギャラリー」と「鞄作り教室」を開き、多くの生徒を養成しながら活躍をしている。

（事例　6）

大手靴修理会社の店長として頑張る　23期生

台東分校の底付けを専攻し、将来独立を夢見て靴メーカーに就職した。数年後大手靴修理会社に就職し、赤い作業服を着てデパートの一角で接客をしながら、靴の修理をしている。

数年前から店長として後輩も育成しているらしい。客と直接話をしながら、客の持ってきた靴を見ることが参考になるという。

（事例　7）

コンフォート・シューズを夫婦で製造する　26期生

台東分校に入校するまでは登山靴のメーカーに勤め底付けをしていた職人さんである。そんな彼が分校で専攻したのは製甲だった、いずれは自営を考えてのことだったのだろう。

卒業後、自宅作業場で外国の有名ブランドシューズの修理と自分で考えたコンフォートシューズを台東分校の修了生に手伝って貰いながら作り始めた。

彼も在学中に知り合った訓練生同士で結婚し、彼の妻は分校を卒業後コンフォートシューズとオーダー靴で有名な靴メーカーの企画部門

に就職したのだが、３年目に退社して自営をしている彼の仕事を手伝い始めた。その後、女性向けの新聞に彼の妻の記事が載り、仕事についての問い合わせが来ているという。

（事例　８）

障害者用の靴作りに励む　26期生

台東分校に初めて入校してきた、数少ない「義肢装具士」の免許を持つ卒業生である。在学中、医学的な足のことに関しては、私が教えて貰うほどの知識を持っていた。

その彼が卒業後、熊谷市の自宅に作業場を作り、機械等の設備をして自営を始めた。年代を超えた訓練修了生同士の横の繋がりもあり、病院回りを中心とする営業活動から、障害者の足の計測、装具靴の製作までを今は一人で行い、多忙を極めているようだ。

他にも靴業界人として地に足をつけて頑張る卒業生も数多くいる。そんな彼らの一部を紹介する。

- 有名靴小売店の直営工場で、中堅技術者として活躍する３人トリオ　14期生、他
- 病気療養中の社長に代わって靴メーカーを切り盛りする　18期生
- 本場ドイツに再三往来して、知人とコンフォートシューズを立ち上げた　22期生
- 大手靴型メーカーの企画開発を担当する　21期生・22期生

等々である。

昨年、某専門校の作品展を見た。そこには約80点ほどの靴が並んでいたが、技術的にもかなりのレベルとアイディアに富んだ作品が展示されていた。台東分校でも卒業制作作品（インターネットのホームページ「革靴職人」に紹介）を毎年制作しているが、年ごとに素晴らしい靴が出来るようになっている。

特に、ここ数年著しく作品のレベルが上がっている。この現象は訓練生側に変化が生じているとしか思えない。確かに手製靴志向の生徒も増えているが、靴作りに取り組む真剣さを見過ごすわけにはいかない。

靴の製造は典型的な労働集約型の産業である。昔は靴づくりは辛い職業の一つと言われたこともあったが、今の若者達は靴づくりを「ファッションにおける最先端の職業の一つ」と捉えているようだ。当校生徒達は靴作りに大きな夢を抱いている。彼らを靴メーカーは、靴業界にとって「金の卵」として捉え、業界の現実を認識させて大いに活用すべきであろう。

民間を含め靴の技術者養成機関の卒業生達が、今後の靴業界を発展させ、数年後の日本の靴業界を大きく変えるのではないだろうか。